opusdei.org

属人区長の書簡 (2011年3月)

日々の生活は、神に近付きたいという私たちの望みを神に表すたくさんの機会に満ちています。四旬節は、愛ゆえに努力をするための特別な時であると、3月の書簡で属人区長は述べます。

2011/03/07

リンク:ベネディクト十六世、2010 年11月4日、『2011年四旬節メッ セージ』 愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに!

「心からの悔い改めによって、人が神に立ち帰ること以上に神に好まれることはない」[1] 常に特別な現実性を持つ言葉ですが、来週からういです。教会は、灰の水曜日の典礼で、聖パウロの言葉を用いて、聖パウロの言葉を用いていりません。なぜなら、にしてはいけません。なぜなら、にしてはいけません。なぜなら、

『恵みの時に、私はあなたの願いを聞き入れた。救いの日に、私はあなたを助けた』と神は言っておられるからです。今や、恵みの時、今こそ、救いの日。」[2]

キリスト教的人生観にとって「すべての時は恵みの時、毎日が救いの日と言わなければなりません。しかし、教会の典礼はこのことばを特別

な意味で四旬節に当てはめます|[3] と教皇様は述べておられます。これ から歩んでいく四旬節の数週間は、 主の恩恵に引き寄せられて、より一 層主に近づくために特にふさわしい 時です。この招きを真剣に受けとめ ることができるよう、聖霊に助けを 願いましょう。そうすれば、聖ホセ マリアが書かれたように、これらの 日々が「岩の表面を素通りする水の ように、私たちの生活に跡形も残さ ずに」[4]過ぎることはないでしょ う。主に申し上げましょう。「でき るだけたくさんの教えを吸収し自己 を一新します。心を改め再び主に向 かって話しかけます。御身がお望み になるように御身をお愛しします、 と。| [5]

恩恵に心を開く決心をして、霊的な 死から永遠の命へと移る罪人の回心 だけを考えてはなりません。この 日々は、キリスト者である男女が神 により近づき、秘跡にしばしば与る

ことを通して徹底してキリストの命 に生き、祈りの心を育み、人々の霊 的物的な向上のために具体的かつ効 果的に仕えるという、毎日の変容へ 促すものであるのです。ベネディク ト十六世はこう説明しておられま す。「回心するとは、流行に逆らっ て歩むことです。それは、『流行』 が、一貫性のない偽りの浅薄な生き 方である場合です。こうした生き方 は、しばしば私たちを捕らえ、支配 し、悪の奴隷あるいはつまらない習 慣の虜(とりこ)にします。これに 対して、人は回心することによっ て、キリスト教的生活の高い基準を 目指します。私たちは生きた人格と なった福音であるキリスト・イエス へと身をゆだねます。| [6]

主は教会の中に、キリスト者として の生活に不可欠である一人ひとりの 継続した回心を後押しするために、 数多くの道と方法を与えられまし た。聖ホセマリアの言葉を通して、

この霊的変化は忍耐強く、時には一 日の間に何度も実行しなければなら ないものであることを思い起こしま しょう。「やり直すって?そうだ。 痛悔の行為をする度に 一実は、毎 日、幾度となく痛悔すべきなのだが 一、その度にあなたはやり直したこ とになる。痛悔するごとに、再び神 を愛し始めるからである。| [7] 神 が今この時、私たちを待っておられ る、ということを度々考えています か。主は私に何をお望みなのかを、 立ち止まって考えていますか。イエ ス・キリストにより一層近づく熱意 に動かされていますか。

ところで今、至聖三位一体と親しく 付き合うための特別な幾つかの手段 についてあらためて話したいと思い ます。それは、多くのところで四旬 節中に行われる、年の黙想会につい てです。もちろん、黙想会は四旬節 中にだけ行われるものではありませ ん。しかし、この時節の典礼は、生 活の改善が急務であるという呼びかけを通して、多くのキリスト者がこの手段に参加するよう促しています。同じことは、オプス・デイが世界中で多くの人たちに提供している霊的形成の手段の中でも重要な、月の黙想会についても言えます。

聖ホセマリアは、この霊的な習慣が 教会においては初めの頃から普通に 行われていたことに注目させました。 いつでも、人は何かの使命に準備する時、あるいは、単島の働きかけに対して寛大なに見い 恵の働きかけに対して寛大なに気で 応えることが急務であることはいた。 いた時、ようといるといるにしまった。

「初代信者は、既に黙想会をしていました。キリストの昇天後、使徒と信者たちの大きなグループが、最後の晩餐の高間に聖母と共に集まり、イエスが約束された慰め主の降臨を待っていたのが分かります。聖霊は、彼らがperseverantes

unanimiter in oration(使徒言行録 1,14)心を合わせて熱心に祈ってい たところに降ったのです。

初代キリスト者たちも同じように表うにあり、
会の生活の人のの生活の人の家者を持た。他の人の家者者を持た。
会の家者ができる。
会の家者を持げていました。
会の家者を持げる。
会の家者者を持ていました。
会の家者者を持ていました。
会の家者者を持ていました。
会の家者者を持ていました。
会の家者者をはいました。
会のないました。
会のないました。
会のないたのです。
会のといました。
はいたのです。
とをえどいる。
はいたのです。
とをえどいる。
はいたのです。
はいたのでする。
はいたのです。
はいたのです。
はいたのでする。
はいたいでする。
はいたいできる。
はいたいでする。
はいたいでする。
はいたいでする。
はいたいでする。
はいたいできる。
はいたいできる。
はいたいできる。
はいたいできる。

創立者はオプス・デイ草創期から、 活き活きとした内的生活を続けるために不可欠である、祈りと糾明のためだけに専念するこのひと時を非常に大切にしていました。ある時、

「この黙想の日々にあなたと私は何 をするのでしょうか」と自問し、こ う答えられました。「主と深く付き 合うこと。ペーのように、文主とのように、名のように、然主に、 知密な語り合いを続けるために、 を捜し求めること。語り合いと。 を捜し求めることではない。 のうちに過ごすのではなく、 のうちに過ごすのではなるが 合ったこのような個人的な祈りと は、 主なる神との直接の付き合い 必要なのです。」[9]

ベネディクト十六世は、教皇職の初 めに、黙想の日々を送ること、「特 に完全な沈黙のうちに過ごすもの | [10]をあらためて勧められました。 伝統となっている今年の四旬節メッ セージにおいて、第2主日の福音書 で読まれる主の変容に言及されて、 こう強調されています。「これは神 の存在に浸るために、日常の喧騒か ら離れるようにとの招きです。主は 私たちが善悪を識別している心の奥 底(ヘブライ4,12参照)にまで届く 言葉を日々伝えようとしておられま

す。そして、私たちの主に従う決意 を強めて下さるのです。| [11]

創立者が「形成と変容」と定義づけた変容」との手段を実りあるも心さとせるといるといるでは、感覚とに欠けるでは、感覚とれに欠るです。これになるでは、のです。これにさるが、です。とが心にが、そのはでが、とがいるとが、なるに具体的に戦うでもとが、なるでも大変難しくなるでも大変難しくなるでも大変難しくです。

ですから、娘たちよ、息子たちよ、月の黙想会や年の黙想会で、沈黙を守ることを大事にして下さい。もったこの形成の手段に与る人、この形成の手段に与る人できている人がでに霊的な事柄に親してでは事る人たちと、キリスト者としての歩る人たちと、キリスト者としての歩ったちと、キリスト者としての歩うはずです。福音書の語る忠実で賢

明な管理人のように、「時間通りに 食べ物を分配する」[12]ことを知ら なければなりません。

要するに、黙想会は『拓』にあるように「潜心の時」でなければならないのです。「神を知り、あなたを知り、進歩するためである。どの点で、どのようにして自らを改めるべきか、すなわち何をすべきで、何を避けるべきかを、見つけるために必

要な日々である。」[13] 聖ホセマリアはまた次のようにも言われています。「黙想会の糾明は、毎晩の糾明よりもさらに深く、さらに広範囲にしなければならない。でないと、自己を改善する絶好の機会を失ってしまう。」[14]

四旬節の典礼には、教皇様がメッ セージで浮き彫りにされたように、 黙想の材料がたくさんあります。第 1主日に読まれる、イエス・キリス トが荒れ野で誘惑を受けられる場面 は、私たちに「キリスト教の信仰は イエスの模範に従い、イエスと一致 しながら、『支配と権威、暗闇の世 界の支配者』(エフェソ、12)と戦 うことを | 思い出させます。「この 世には悪が働いており、主に近づき たいと望むあらゆる人を絶えず誘惑 しているからです。| [15] ですか ら、この戦いには超自然的な手段に 信頼して頼りつつ備えることを考え なければなりません。聖ホセマリア

は非常に超自然的な作戦を提案されていました。「内的戦いには巧妙な 戦術を使うべきである。毎日の戦い は本陣から遠く離れたところで続け るのだ。

敵は、小さな節欲、毎日の祈り、規則正しい仕事、生活規定など、前線を襲うだろうが、破られやすい城壁にはなかなか近づけない。たまたま城壁にたどりついたとしても、敵は既に疲れ切っているだろう。」[16]

その次の日曜日には、キリストを指して「これは私の愛する子、私のたっ者、これに聞け」[17]と私私聞になる天の父の時になる天の父の時になります。念祷のせになります。からなりにからなりにからなければなりで、それを関まり一層努めなければなりままり、そのないもたらずで受けた。また個人的な霊的指導で受けた

勧めを、どのように支えにするかを 考えるのです。

3月27日の四旬節第3主日の典礼は、 「『水を飲ませてください』(ヨハ ネ4,7) というイエスの問いかけを私 たちに示します。 (…) 全ての人に 対する神の熱い思いを表すと同時に 『その人の内で泉となり、永遠のい のちに至る水』(ヨハネ4,14)とい うたまものへの望みを私たちの心の 中に呼び覚まそうとしています。上 [18] 主の弟子である私たちは、あら ゆるところに主の光と恩恵を届ける よう招かれていることをいつも自覚 して、熱心にそのことと取り組みま しょう。何よりも、友だちや親戚が ゆるしの秘跡に与って神と和解する ように手伝い、また、四旬節中の黙 想会、あるいは長い黙想会に招くこ とです。

教会とオプス・デイの保護者である 聖ヨセフの祝日が近づいています。 オプス・デイにおける主との〈愛の 約束〉を、感謝と喜びのうちに19日 に更新する準備をし、あらゆる世代 のあらゆる立場の多くの人々がオプ ス・デイにおいてイエス・キリスト に従うことを決意するお恵みを、神 から獲得してくださるよう信頼を込 めて聖なる太祖に願いましょう。

その上、この日は大勅書Ut sitが荘厳 に施行された記念日でもあります。 これによって、愛するヨハネ・パウ ロ二世がオプス・デイを属人区とし て設置され、主が1928年10月2日に 聖ホセマリアの心に刻まれた神の望 みを実現するために、司祭と信徒が 有機的に協力することをお定めに なったのです。これこそは、教会の 司牧のために必要な道を開くため に、聖霊が第二バチカン公会議にお いて望まれた形態なのだということ を自覚して、徹頭徹尾忠実である義 務が私たちにはあります。

28日は創立者の司祭叙階記念日で す。至聖なる三位一体に心を込めて 感謝しましょう。私たちひとり一人 は、創立者がキリストの司祭職を受 けられたことから生まれた子どもな のですから。創立者が寛大に全面的 に神のお望みを受け入れなかったな ら、教会にオプス・デイは存在しま せんでした。オプス・デイの創立 は、創立者がサラゴサの神学校時代 に自問していた「なぜ私は司祭にな るのか」という問いへの答であると 同時に、選んだ道を歩み始め、歩み 続ける決心をした最も深い理由の基 盤となったのです。

あらゆる国で司祭への召し出しが増 えるように、創立者の取次ぎを通し て願いましょう。忠実で、神を愛 し、喜んで人々に仕え、教皇に全面 的に忠実で、それぞれの司教と固く 一致している司祭を送ってくださる ように。またオプス・デイにおいて も、主が私たちに求めておられる使 徒職の仕事を世話するために必要な司祭が欠けることのないように願いましょう。同時に、全てのカトリック信者が、一人ひとりに神がもたらされた司祭的な魂を育むように、至聖三位一体に執拗に願いましょう。

教皇様とその協力者の方々のための 祈りを止めないで下さい。特に、四 旬節の第1週目は教皇庁の黙想会が ありますから、より熱心に祈りま しょう。また、この期間に年の黙想 会をする私たちも、この機会を活用 しようと思います。この日々に皆さ んが霊的に私に付き添ってくれるこ とを、心からの喜びを持って期待し ています。私は、神がこの手段を诵 してもたらされる溢れんばかりの恩 恵を、誰一人として無駄にすること のないようにと主に毎日願っている ことを、隠すつもりはありません。

心からの愛情を込めて祝福を送りま す。 皆さんのパドレ

†ハビエル

ローマ、2011年3月1日

- [1] 証聖者マキシモ、書簡11。 (『毎日の読書』2、75ページ)
- [2] 『ローマミサ典礼書』灰の水曜日、第二朗読(2コリント6,1-2)。
- [3] ベネディクト十六世、2010年2月 17日、一般謁見の講話。
- [4] 聖ホセマリア、『知識の香』59。
- [5] 同上。
- [6] ベネディクト十六世、2010年2月 17日、一般謁見の講話。
- [7] 聖ホセマリア、『鍛』384。

- [8] 聖ホセマリア、1963年2月25日、 説教のメモ。
- [9] 同上。
- [10] ベネディクト十六世、2005年11 月26日、定期ローマ訪問の司教たち への講話。
- [11] ベネディクト十六世、2010年11 月4日、『2011年四旬節メッセー ジ』2。
- [12] ルカ12,42。
- [13] 聖ホセマリア、『拓』177。
- [14] 聖ホセマリア、『道』245。
- [15] ベネディクト十六世、2010年11 月4日、『2011年四旬節メッセー ジ』2。
- [16] 聖ホセマリア、『道』307。
- [17] マタイ17,5。

[18] べえ	ネディクト十六世、	2010年11
月4日、	『2011年四旬節メ	ッセー
ジ』2。		

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2011nian-3yue/ (2025/12/13)